

査読論文

20世紀初頭における棉花市場の変動と沙市産棉地帯の対応
— 黄金期（1919-1921年）を中心に —

瀬戸林 政孝*

要 旨

本稿の課題は、中国紡績業が急激に拡大した黄金期（1919-21年）と呼ばれる時期に、棉花生産地でどのような変化が生じていたのかを検討することである。先行研究では、中国産長繊維棉花（米国種棉花）の生産が拡大し始めたのは、中国紡績業で細糸生産が始まる1920年代以降であることが指摘されてきた。

しかし、拙稿で明らかにしたように、1910年代には揚子江中流域や華北の産棉地帯における米国種棉花の生産は、日本紡績業の高番手化とともに一定程度拡大していた。特に、本稿で対象とする湖北省沙市の産棉地帯では、1910年代中葉に生産された棉花の50%以上が米国種棉花であった。このように米国種棉花の生産を進展させた要因は、日本商社が産地買付を開始したこと、米国種棉花の担当たり価格が在来種棉花を上回ったことであった。

1910年代末まで、沙市産棉地帯の米国種棉花生産は進展していたが、黄金期に産棉地帯を取り巻く状況は大きく変わった。国内紡績業の急激な拡大とともに原料需要が急激に拡大したため、国内向けの棉花需要が増大したのであった。さらに、黄金期に生産された綿糸の多くは、太糸であったため、国内市場では米国種棉花ではなく在来種棉花が求められた。

日本商社は産地買付を行わなくなり、さらに、需要の拡大した在来種棉花の価格が米国種棉花を上回ったため、産棉地帯では米国種棉花の生産は衰退した。しかしながら、黄金期が終わると二つの条件は再度生じ、米国種棉花が再び進展し始めた。

それぞれの時期で市場が求める棉花の種類に対応して棉花生産が展開していたことは、市場の変動に対して小農が柔軟に作付転換を行っていたことを示しているのである。

キーワード

中国, 沙市, 黄金期, 棉花市場, 米国種棉花, 小農

はじめに

中国では明清期に全国市場が形成され、市場経済が相当程度浸透していたとされる。明代以

* 執筆者：瀬戸林 政孝

連絡先：090-3379-3492

機関/役職：慶應義塾先端研究センター/研究員

機関住所：〒108-8345 東京都港区三田2-15-45

E-mail：msetobayashi@gamma.ocn.ne.jp

降、江南地域における棉業や絹業等の商品生産の展開によって商品経済が発達し、商品の移出を通じて全国に普及した。各地域は比較優位のある商品作物、米穀等の食料農産物や手工業品の生産を通じて市場に参入し、全国規模での地域間分業が形成されていた。特に棉花は江南、揚子江中流域、華北等で生産の拡大した最も重要な商品作物であった。

こうした商品作物等の生産の担い手が、中国小農であった。中国では小農社会は明代に成立したとされる¹⁾。小農の農業経営では、小農が独立した経営主体として作付する農産物を選択し、もし、作付した農産物に比較優位がなくなれば、即座に、他の農産物に作付けを転換した。

では、20世紀初頭に、東アジアの紡績業の進展とともに棉花市場が変動する中で、中国小農はどのように作付けを転換したのであろうか。

19世紀末に勃興した日本・上海紡績業は、1890年代以降、短繊維棉花を原料とする太糸生産に加えて長繊維棉花を用いた細糸生産を開始し、東アジア棉花市場では短繊維棉花とともに長繊維棉花需要が生じていた。拙稿で明らかにしたように、こうした市場の変動に対して、中国の産棉地帯では、長繊維の米国種棉花生産が進展し²⁾、1910年代中葉には、輸出棉花に占める米国種棉花の割合は、漢口で約50%、天津で約25%に達していた³⁾。

先行研究によれば、米国種棉花生産は、1920年代以降国内市場向けに展開し、拡大していたことが指摘されている⁴⁾。しかしながら、黄金期における棉花生産の展開は必ずしも明らかになっているとはいえない。

1910年代までに米国種棉花生産が進展した要因は、小農の対応という内的要因を別にすれば、日本商社が産地買付を開始したこと、米国種棉花の担当たり価格が在来種棉花を上回ったことであり、これが、小農が米国種棉花に作付けを転換するための必要条件であった。しかしながら、1919年以降、中国紡績業が黄金期と呼ばれる急激な拡大期を迎えると、各産棉地帯を取り巻く状況は大きく変わっていた。

そこで、黄金期(1919-21)という特殊な状況の中で、二つの条件がどのように変容し、棉花生産がどのように展開したのかを湖北省西部に位置する沙市産棉地帯に焦点をあてて検討したい。

沙市は、清代以降、棉花の主要な集散地となり、沙市周辺の産棉地帯は沙市市場の変動に対応しながら棉花生産とともに綿布生産を展開していた。沙市は棉花とともに土布を揚子江流域の各地域へ供給する基地となり、19世紀末には、華西のマンチェスターと称されるほどまでに成長し、20世紀初頭には、沙市産棉地帯で生産された棉花もまた紡績業向けに供給されるようになり、沙市産棉地帯は中国の典型的な産棉地帯の一つであった。

以上を踏まえて、第1節では、日本市場と中国国内市場の変動と両市場への棉花供給地であった漢口市場の変化を考察し、黄金期の沙市産棉地帯に求められた棉花の質を検討する。第2節では、黄金期の沙市市場における棉花取引を考察し、沙市産棉地帯の米国種棉花生産の変容を検討する。

第1節 沙市産棉地帯の棉花生産を取巻く棉花市場の変動

(1) 日本紡績業と国内紡績業の発展と原料棉花

中国では、明代以降、副業としての手織りによる土布の生産が各地域に伝播しながら展開し、華中の江南、揚子江中上流域の沿岸部、華北の直隸省に広大な産棉地帯が形成された。産棉地帯の中には衰退した地域もあったが、多くは19世紀末まで土布の原料供給地として維持、拡大を続けていた。こうした中、19世紀末に東アジアでは近代紡績業が勃興した。1880年代に大阪で、1890年代に上海で、紡績工場が建設され、主にアジア産の短繊維棉花を用いた綿糸生産が開始された。紡績業の進展とともに、上記の地域で生産された棉花の多くは土布の原料から機械製綿糸の原料に転じ、特に揚子江中上流域産の産棉地帯は、日本・上海紡績業との関係を強めていくこととなった。

① 日本紡績業の質的発展と原料棉花

1880年代を通じて量的発展した日本紡績業は早くも1890年代には20番手綿糸の生産を開始し、それ以降高番手化を進展させた。表1は日本紡績業における各番手の綿糸生産量を示したものである。綿糸生産量の大部分を占めていた16番手綿糸と20番手綿糸に顕著な分岐が見られる。1916年までは共に拡大傾向にあったが、16番手は1916年をピークに減少傾向に転じたのに対し、20番手は拡大傾向を示していた。小幅な増減はあるものの、20番手綿糸と同様に増加傾向にあったのが、30～80番手の綿糸である。一方、10番手と14番手は緩やかに拡大しながら

表1 日本紡績業における各番手の綿糸生産量

(単位=千梱)

年	10番	14番	16番	20番	30番	32番	40番	42番	60番	80番	その他	総計
1912	60	127	369	368	39	47	24	51	19	12	237	1,352
1913	60	138	419	404	43	56	27	57	19	12	283	1,518
1914	101	159	414	475	47	52	23	70	18	9	299	1,666
1915	121	153	420	475	55	57	35	77	16	9	302	1,720
1916	125	150	445	534	64	65	62	94	19	10	358	1,926
1917	126	152	390	565	73	63	61	106	19	13	357	1,924
1918	103	142	272	547	80	75	93	86	23	12	370	1,804
1919	136	154	257	576	108	80	96	102	22	13	378	1,921
1920	142	150	253	525	96	75	84	92	17	10	372	1,817
1921	158	173	298	434	77	56	77	76	20	12	382	1,761
1922	151	153	300	787	95	88	96	119	24	16	399	2,228
1923	160	166	273	717	98	80	109	114	23	18	412	2,171
1924	142	149	233	661	101	80	139	125	25	22	395	2,073
1925	122	72	258	712	111	69	165	170	30	19	608	2,337

出所：鉄道省運輸局『綿糸、棉花、麻、苧類ニ関スル調査』1927年、29-30頁。

も、1920年代初頭には横ばい状態、もしくは減少に転じていた。日本紡績業では1910年代中葉以降、20番手以上の綿糸生産は増加傾向、16番手以下の綿糸生産は相対的に衰退傾向にあったといえる。

こうした二つの傾向は、輸入される棉花の質に影響を与えた。なぜなら、アジアの在来種棉花は16番手までの綿糸生産に適した棉花であったのに対し、20番手以上の綿糸生産には長繊維棉花を混入する必要があるからである。表2は日本の各国別棉花輸入を示したものである。高番手化の進展に伴い、長繊維棉花であるアメリカ棉花の輸入が増大しているのが特徴的である。この点に加えて、いくつかの重要な変化について指摘したい。

第1に、1918年のインド棉花の減少と中国棉花の増加である。これはインドと中国の在来種棉花における代替関係を示していると思われ、そのため、インド棉花の輸入の減少は、1918年の中国における日本向けの在来種棉花需要を拡大させたことを示唆している。第2に、1919-1921年のアメリカ棉花輸入量の増加である。この期間の輸入量は300万担を越え、その期間の前後とは異なる傾向を示していた。第3に、黄金期(1919-21年)における中国棉花輸入量の減少とインド棉花輸入量の増大である。

黄金期におけるアメリカ棉花とインド棉花輸入量の増大は、第一次大戦以後の「世界的不況」の影響を受けた両棉花価格の下落に起因していた⁵⁾。インド棉花は1919年後半から暴落を開始し、1920年にはいと銀高要因も加わって中国棉花に比べて割安感が強まった⁶⁾。また、アメ

表2 日本の各国別棉花輸入量と割合

(単位=担)

年	総輸入量	中国		インド		アメリカ	
		輸入量	割合	輸入量	割合	輸入量	割合
1912	6,076,730	657,644	10.80%	3,199,224	52.60%	1,872,237	30.80%
13	6,702,181	575,248	8.60%	4,004,458	59.70%	1,720,082	25.70%
14	6,200,791	416,901	6.70%	4,142,667	66.80%	1,369,625	22.10%
15	7,292,041	591,932	8.10%	4,896,782	67.20%	1,614,661	22.10%
16	8,363,339	659,758	7.90%	5,133,005	61.40%	2,206,231	26.40%
17	7,047,602	643,467	9.10%	4,495,140	63.80%	1,704,972	24.20%
18	6,825,654	1,231,001	18.03%	2,903,201	42.53%	2,509,530	36.77%
19	7,919,398	993,636	12.55%	3,574,731	45.14%	3,113,911	39.32%
20	7,838,957	203,477	2.60%	4,194,836	53.51%	3,273,461	41.76%
21	8,757,816	560,484	6.40%	4,406,717	50.32%	3,486,143	39.81%
22	8,710,569	633,428	7.27%	4,944,437	56.76%	2,898,834	33.28%
23	8,846,201	759,338	8.58%	5,145,306	58.16%	2,524,723	28.54%
24	8,123,676	1,007,605	12.40%	4,538,988	55.87%	2,370,481	29.18%
25	10,942,048	690,449	6.31%	6,154,475	56.25%	3,799,504	34.72%

出所：横浜市編『横浜市史 資料編二 日本貿易統計(増訂版)1868～1945 統計編』有隣堂、1958年、263～266頁より作成。

リカ棉花価格は1918年末から崩落を開始し、アメリカ棉花と中国棉花の価格差は急速に縮小していた⁷⁾。1920年前後のアメリカ・インド棉花価格の下落は、後述する1920年前後の中国産棉花の不作とともに中国棉花の日本向け輸出の減少要因となったのである。

②中国紡績業の量的発展と原料棉花

1890年における上海紡績業の勃興以来、中国国内向けの棉花需要も生じていたが、原料棉花の多くは江南の産棉地帯から調達されていた。1910年代には上海を中心に紡績工場の建設ラッシュが見られ、特に黄金期の紡績業の発展は目覚しく、上海紡績業の紡錘数は1919年の88.8万錘から1922年の175万錘へと急増していた。一方、揚子江中流域でも紡績工場が建設され、湖北省の紡錘数は1919年の9万錘から1922年の24.9万錘に増加し、湖南省でも黄金期に紡績業が勃興し、1922年の紡錘数は4万錘であった⁸⁾。

このように1910年代以降揚子江沿岸の各地域で、紡績業の量的発展が見られたが、多くの工場では日本紡績業で見られたような高番手化は生じなかった。最も進展していた上海紡績業でさえ、1913年の綿糸生産量の約90%以上を16番手以下の綿糸が占め、黄金期直前の1917年でも綿糸生産量の80%以上が16番手以下の綿糸であった⁹⁾。黄金期には一定程度高番手化が進展するが、主要な生産綿糸は16番手以下の綿糸であり、湖北省や湖南省の紡績工場でも¹⁰⁾、16番手以下の綿糸が綿糸生産量の90%以上を占めていた¹¹⁾。

そのため、この時期の揚子江流域に建設された紡績工場の原料棉花のほとんどは長繊維棉花ではなく短繊維棉花であった。高番手化の進展した上海の一部の紡績工場では、20番手以上の綿糸の原料として輸入アメリカ棉花や陝西棉等の国内産長繊維棉花が消費されていたが、紡績工場の多くで用いられた棉花は在来種棉花であった。黄金期における上海紡績業の量的拡大は、原料棉花需要を急激に増大させ、江南に加えて、揚子江中流域からの原料供給を拡大させた。一方、湖北省や湖南省の紡績工場は原料棉花を現地調達し、特に揚子江沿岸の産棉地帯で生産される棉花に依存していた。湖北省の紡績工場では、1921年に16万5千担、1922年には15万担の棉花が消費され¹²⁾、ほとんどは湖北省内から調達された。

以上、日本市場は黄金期直前には中国棉花需要を一時的に増大させたが、インド・アメリカ棉の割安感が高まると急速に需要を減退させていた。一方、国内市場は紡績業の量的発展とともに短繊維種の在来種棉花の需要を増大させていた。こうした両棉花市場の変動が棉花集散地にどのような影響を与えていたのかを明らかにするために、次項では両市場への棉花供給地であった漢口市場の棉花価格を考察していく。

(2) 漢口市場と棉花価格

明清期以来、漢口は揚子江中上流域最大の棉花集散地であった。1910年代に漢口に集荷された棉花は、①日本市場向け、②四川省等の国内市場向け、③武昌の紡績業向けに輸移出され、1915

年には漢口輸出棉花の50%以上が米国種棉花であった。各市場で消費された棉花の質に注目すると、①は米国種棉花(陝西棉・老河口棉・沙市棉)と在来種棉花, ②は在来種棉花(裡河棉), ③は良質な在来種棉花(家郷棉)であった。括弧内の棉花は代表的な棉花の商標を示したものである。

陝西棉は中国で最も良質な棉花とされ、長繊維の米国種棉花であった。老河口棉と沙市棉は在来種棉花と米国種棉花の両方を含み、時期によって在来種と米国種のシェアは変動した。家郷棉は紡績に適した棉花であり、その多くは武昌紡績で消費され、裡河棉は典型的な在来種棉花であり、手紡に適した棉花であった¹³⁾。

棉花の価格帯は質によって決まり、黄金期直前には以下のように順位付けされていた。

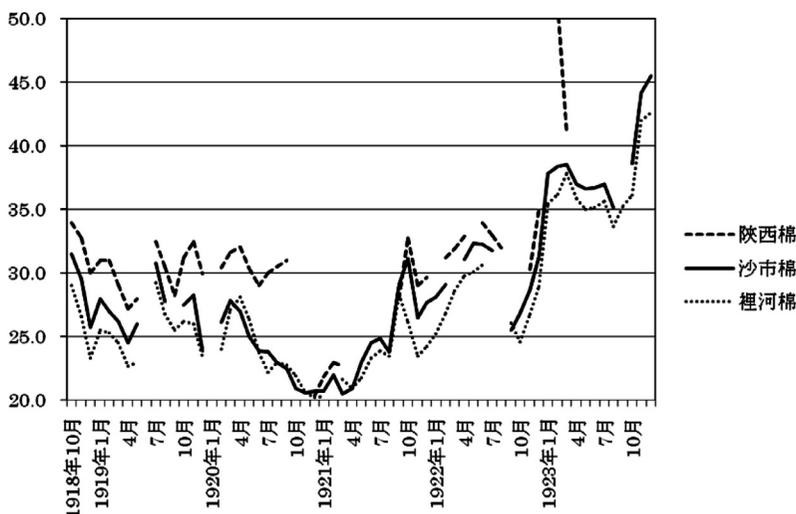
陝西棉>沙市棉≒老河口棉>家郷棉>裡河棉(以下では、この順位付けを常態と呼ぶ。)

一般的に、米国種棉花は在来種棉花より担当たり一割程度高価格であった。在来種と米国種を含む沙市棉・老河口棉の価格は米国種棉花のシェアが増加すると陝西棉の価格に近づき、在来種棉花が増加すれば家郷棉、裡河棉の価格に接近した。

漢口の棉花輸移量は、1910年代末に100万担に達し、黄金期の1920年(41万担)、1921年(64万担)には一時的に減少したが、1923年以降100万担に回復した。先に見た日本の中国棉花輸入量と同様の傾向にあった。

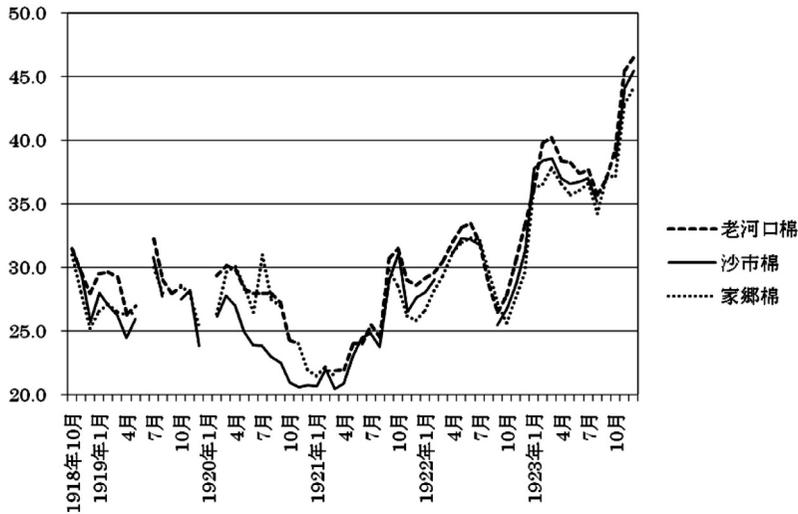
以上を踏まえて、漢口市場における棉花価格を検討していこう。図1と図2は1918年10月から1923年10月までの期間の沙市棉の価格と他四種の棉花価格を比較したものである。先ず、図1を用いて陝西棉と裡河棉と沙市棉を比較してみよう。1918年10月から1919年末まで、3種の

図1 漢口における陝西棉と沙市棉と裡河棉の価格 (単位=両)



出所:『漢口棉花綿糸布市況』『月報』第314号~第374号(1918年10月から1923年10月)より作成。

図1 漢口における老河口棉と沙市棉と家郷棉の価格 (単位=両)



出所：「漢口棉花綿糸布市況」『月報』第314号～第374号（1918年10月から1923年10月）より作成。

棉花価格は常態にあった。しかし、1919年末以降、それぞれの価格は常態ではなく、陝西棉は常に上位にあったものの、沙市棉は裡河棉価格に接近するか、もしくは、裡河棉価格より低位を推移していることもあった。こうした状況は1921年10月頃まで続き、1922年以降、数回の常態の崩れを別にすれば、再度常態に戻ったといえる。

次に、図2を用いて老河口棉と家郷棉と沙市棉を比較してみよう。家郷棉は紡績業向けの良質な在来種棉花であったため、米国種棉花価格に接近した価格帯にあった。1919年初頭までは常態にあったが、それ以降沙市棉価格が低位を推移している。老河口棉も沙市棉ほどではないにしろ、家郷棉より低位にあった月もある。こうした状況は、1921年まで続き、それ以降、数回の常態の崩れを別にすれば、各棉花価格は常態を維持していた。

図1と図2の考察より、1919年末から1921年までの約2年間、沙市棉の価格はその前後とは明らかに異なる趨勢を示していた。沙市棉の価格は家郷棉だけでなく典型的な在来種棉花であった裡河棉より低い月もあった。つまり、沙市棉は在来種棉花の価格に接近していたのである。

以上のような漢口市場における棉花価格の変化は、先に指摘した日本市場・国内市場の変動に加えて、もう一つの要因があった。漢口市場における脱脂綿や布団等の中入用向け棉花需要の拡大である。1917年まで中入用向けの棉花は天津から日本に輸出されていた。しかし、1919年の華北の作柄不良によって、生産量と輸出量が激減したため、1919年に初めて漢口から中入用の棉花として裡河棉等が日本市場に輸出された¹⁴⁾。輸出された棉花は低廉であったため、これ以降輸出は拡大し、中入用の在来種棉花のみの輸出量は、1919年に3,800担、1920年に1万

2千担, 1921年に3万1千担, 1922年に3万担であった¹⁵⁾。つまり, 黄金期に, 漢口市場では新たに中入用の在来種棉花の需要が生じていたのである¹⁶⁾。

最後に, 本節をまとめておこう。

日本市場は, 黄金期直前の1918年に一時的に中国棉花の需要を高めたけれども, 黄金期にはインド棉花・アメリカ棉花価格の崩落によって, 長繊維棉花はアメリカ棉花, 短繊維棉花はインド棉花に依存するようになった。特に黄金期の1919年~1921年には, 日本の中国産米国種棉花の需要は減少していた。国内市場では, 黄金期における紡績業の量的発展によって, 短繊維棉花需要が拡大し, また, 日本市場においても中入用の原料として短繊維棉花需要が生じていた。

日本向け米国種棉花輸出が減少すると同時に国内外の在来種棉花需要が拡大した時, 漢口の各種棉花価格の序列は崩れ, 沙市棉は在来種棉花の価格水準に接近していたのである。では, 沙市棉価格の低値は, 何を反映していたのであろうか。次節では, 沙市市場の棉花取引に注目して, 沙市産棉地帯の置かれた状況について考察したい。

第2節 沙市における棉花の買付と産棉地帯の変化

(1) 沙市市場の棉花取引

①1918年度までの棉花生産と取引

まず, 黄金期以前の沙市の棉花生産について概観する。沙市は清代以降, 湖北省の重要な土布生産地であると同時に産棉地帯であり, 非産棉地帯向けにも棉花が大量に移出されていた。こうした沙市の棉花生産は, 1890年代の日本向け輸出の開始以降, 紡績業との関係を強めていくこととなった。そして早くも1900年代初頭には, 短繊維種の在来種棉花に加えて, 長繊維種の米国種棉花の生産が開始された。

沙市産棉地帯の米国種棉花の作付けは, 湖広総督張之洞による長繊維種の種子の配布によって開始され, 1910年代に拡大に転じた。こうした拡大の背景には日本紡績業からの強い要請を受けて行われた日本商社の産地買付があった¹⁷⁾。

沙市の米国種棉花生産量は, 1915年には在来種棉花の生産量を上回り, 1917年には,

「出廻高 昨年度(1917年, 筆者注)棉花ノ沙市ニ出廻ル見込数量ハ約十一万担ニシテ其内訳ハ公安縣七万担, 石首縣一万担, 松滋枝江宜都江陵當陽ノ諸縣ヨリスルモノ三万担位ナルヘシ尚公安, 石首其他ノ縣ヨリ沙市ヲ經由セスシテ直接漢口ニ移出スルモノ約六万担アリ而シテ右合計十七万担ノ内土花ハ二割洋花ハ八割ヲ占ム洋花ノ出廻リノ増加セシハ近年ノコトニシテ数年前ヨリ邦人棉花商カ當地ニ出張所ヲ設ケ競争的ニ洋花ノ買収ニ力メ價格亦年々騰貴シタル結果其ノ栽培面積ヲ増加シテ今日ノ如キ盛況ヲ見ルニ至レリ」¹⁸⁾

とあり, 出廻高だけを見れば, 在来種3万4千担, 米国種13万6千担であり, 米国種棉花が多

くを占めるようになっていた。これは、上記の史料にも指摘されているように、日本商社の米国種棉花買付け、価格高騰による米国種棉花の栽培面積の拡大と在来種から米国種への作付け転換が要因であった。

例年の各種棉花の生産量は、米国種が13.5～15万担、在来種が8.5～10万担であった¹⁹⁾。一般的に米国種棉花の主要な産地は公安・石首・監利・江陵・潛江であり、各産地の米国種と在来種の最大生産量は約20万担であった。また、各産地から漢口に集荷される量は10万担、沙市における消費額は少量、沙市から輸移出される量は10万担であった。一方、在来種棉花の主要な産地は松滋、枝江、宜都、江陵であり、各産地の米国種と在来種の最大生産量は約13.5万担であり、大部分は各産地から直接民船によって四川省に輸送された。各産地から沙市に集荷された1万担の内、約1,350担が蒲団棉や中入棉として消費され、約8,500担が国内市場、主として四川向けに移出されていた。

沙市における棉花商人は日本商人と中国商人であり、米国種の約6～7割を日本商人が取扱い、在来種の約8～9割を中国商人が取引していた²⁰⁾。こうした取引商人の違いは輸送手段にも現れた。

「其輸送ハ洋花ハ大部分日清汽船会社所属船ニ由リ（是レーハ洋花ノ輸出ハ大部分邦商ノ取扱ニ係ルト一ハ保險ノ關係上本邦船ニ由ルラ便トスルニ依ルモノナリ）土花ハ邦商取扱ノモノヲ除クノ外全部民船ニ由ル」²¹⁾

とあるように、日本商人、中国商人はともに日本市場向けであった米国種棉花を汽船によって下流域に輸送した。日本商人は、産地で買付けた棉花を漢口に直接輸送する場合もあれば、沙市に輸送する場合もあり、後者の場合は日清汽船によって沙市から漢口に輸送した。また、国内市場向けであった在来種棉花の多くは中国商人によって民船で四川省や湖南省等への消費地に輸送された。

1917年までの米国種棉花生産の拡大を受けて、1918年も市況は盛況に開始された。新棉出廻り期にあたる9月、10月には沙市棉花価格は「未曾有の高値」を付け²²⁾、9月から10月までに7万5千担が漢口に移出された²³⁾。しかし、11月以降、沙市棉花価格はアメリカ棉花暴落の影響を受け、下落傾向に転じ、11月中旬から12月までの買約出来高は、6千担にまで減少した。さらに、アメリカ棉花の暴落は上海・漢口における棉花相場も下落させ、一時的に取引を見合わせる商人もあった。

1919年1月には沙市棉花価格は回復する一方で契約量は減少したが、1918年末に契約されていた棉花が到着し、予定通りの取引が行われた。2月には1月の棉花価格の高騰を受けて沙市に集荷される棉花は減少したが、2月下旬から棉花価格は下落し、取引が回復した。3月と4月の取引は安定していたが、5月の棉花価格の高騰によって、取引は休止した。1919年1月～5月までの契約高は約6千担であり、産地における現存高は6千担に達した。5月以後棉花価格はさらに暴騰し取引は停止した。この期間に汽船で漢口に移出された棉花は2万4千担であ

り、前年の分も含めて10万担に達し、他に9千担が民船によって輸送された²⁴⁾。

1919年の5月までの取引は順調ではなかったが、1919年の棉花の植え付け段別は、前年より米国種棉花が約5割、在来種棉花が約2割増加したという²⁵⁾。

②黄金期以降の棉花取引

このような状況は1919年の凶作を期に一変した。棉花耕作地は増加したが、降雨と洪水の被害によって、生産量は激減したのである。在来種棉花の生産量は3.5万担で全て四川方面に移出され、米国種棉花の生産量は7万担で全て漢口・上海方面に移出された²⁶⁾。1919年の各商人の取引量は、日本商人が米国種棉花を3万担、中国商人が米国種棉花を2万担、在来種棉花を2.5万担買付けていた²⁷⁾。例年であれば、沙市で買付けられ漢口・上海に移出された米国種棉花はさらに日本向けに輸出されたが、1919年9月以降日本向けに輸出されなくなった²⁸⁾。

この理由として、米印棉の割安、銀塊高騰による為替不利等が挙げられているが²⁹⁾、この点に加えて、中国紡績及び上海・漢口の中国商人による買付高の激増、つまり国内市場における棉花需要の拡大がもう一つの重要な要因であり、1919年9月を境に、沙市棉花は国内市場向けに転じたのであった。しかし、黄金期に生産量の拡大した綿糸は太糸であったため、細糸生産向けの米国種棉花の需要は限定的であった。

1919年度の沙市市場の状況に関して、

「当地市場並ニ各産地ニ於ケル相場ハ常ニ高値ヲ唱ヘ漢口及上海乃至本邦ニ於ケル相場ト伴ハ是レ地方作柄ノ不況ナリシト漢口、上海及四川方面ノ支那商カ先高見越ノ下ニ続々産地ニ入込ミ多額ノ買付ヲ為シタルニ依ルモノナリ殊ニ土花ハ四川方面ニ於ケル需要夥多ニシテ(是レ前年度中兵乱ノ為四川ヘノ運輸途絶シ居リシ結果ナリ)供給之ニ伴ハサリシニ依リ暴騰ニ暴騰ヲ重ネ常ニ漢口相場ニ比シ三兩乃至五、六兩ノ開キヲ存セシヲ以テ遂ニ邦商ノ覬覦ヲ許ササリキ尚支那商人ニヨリテ下流筋ニ仕向ケラレタルモノ皆無ナルノミナラス却テ漢口方面ヨリ四川方面ニ向ケ上江セラレシモノ少カラス」³⁰⁾

とあるように、国内市場、特に四川市場向けに転じた在来種棉花が多かったようである。

1920年9月の新棉出廻り時期を迎えても、沙市棉花市場の不況は続いていた。米棉・印棉の大豊作による暴落や上海・漢口・日本も前年物の棉花をもてあましていたため、日本商人、中国商人は「形勢観望手控え中」であった³¹⁾。

また、1920年の作柄は不良であった上に、漢口・上海等の主要市場における棉花相場が異常な低廉さを示し、さらに四川との交通が殆ど途絶され、沙市の棉花市場は不況であった。ただ、在来種棉花だけは、湖南方面の需要に供給され、さらに四川との交通の回復を見越した中国商人によって思惑買いされたため、取引は活発であった。

一方、米国種棉花の取引は停滞し、1920年9月から11月までの取引高は僅か3,500~5,000担であり³²⁾、例年同期の取引高と比較すると急減していた。漢口・上海方面に汽船によって輸出

された棉花は10月末までに4千担に達せず、前年同期に比較して四分の一、前々年に比較して五分の一であった³³⁾。

1920年11月以降も取引は停滞し、11月から1月までの米国種棉花の取引高は約3,500担であった³⁴⁾。一方、在来種棉花の取引高は1万7千担に達し、四川方面及湖南方面に需要されていた。1920年11月から1921年1月までの米国種棉花の漢口方面への輸出量は、汽船によるものが4,500担、民船によるものが1,000担であり、その内日本商人が取り扱った米国種棉花は4,500担であり、これほど少量の取引しか行わなかった年はなかったとされる³⁵⁾。

1921年には7月に大洪水が発生し、平年産額の10分の1前後にまで落ち込んだ地域もあった。さらに、7月下旬には湖南、湖北両軍の戦闘が始まり、次いで四川・湖北両軍の交戦によって棉花の出廻りはさらに不安定さを増し、取引は停滞した。そのため、1921年10月までの日本商人の取引高は100担にも満たなかった³⁶⁾。

1921年10月以降、両湖及び四川の戦闘は休止したが、1921年度の棉作は2～3割作の凶作であり、取引は閉塞感があったという。特に11月中旬以降またしてもアメリカ棉・インド棉の大暴落と金融の閉塞によって、上海・漢口相場が大暴落したため、取引が休止した。9月以来の日本商人の買付額は、1918年同期が4万担、1919年同期が1万8千担、1920年同期が6千担であったのに対し、1921年は千担弱にまで落ち込んだ³⁷⁾。

こうした状況は継続し、1921年10月から1922年4月までの沙市の市況は「沈滞不振」とされ³⁸⁾、1922年5月～7月までの沙市の棉花市場では「在荷皆無」という有様であった。しかし、1922年によりやく過去三年間続いた不作の状態を脱し、作柄は6分作程度にまで回復した³⁹⁾。1922年の9月以降沙市棉花市場は復興し、その多くは国内市場向けに移出され、上海の各紡績工場や漢口の裕華、申新紡績において消費された⁴⁰⁾。

以上の検討を通して、以下の4点が指摘できる。第一に1919年9月以降、沙市産の米国種棉花が日本向けに輸出されなくなったこと、第二に日本商社による沙市での棉花買い付けが激減していたこと、第三に黄金期の沙市産棉地帯の多くは不作であったこと、第四に漢口向けを除くと沙市に集荷された棉花の多くが四川や湖南の国内市場向けに移出されていたことである。つまり、黄金期に沙市産棉地帯は不作であり続け、また、沙市棉に求められた棉質が変化していたのである。こうした変化の中で、沙市の棉花生産はどのように対応したのか、次項では日本商社の棉花買い付けの変化と沙市棉花の価格に注目して検討したい。

(2) 棉花価格と棉花生産

先述したように、1919年9月から日本向けに輸出される沙市の米国種棉花は急速に減少した。そこで、日本商社が沙市市場で買付けた棉花について、検討していきたい。

表3は、沙市から漢口へ汽船輸送された棉花の移出量を示したものである。先述したように、沙市から汽船輸送された棉花の多くは日本商人が買い付けた米国種棉花であった。棉花の取引

表3 沙市から漢口に汽船輸送された移出量

(単位=担)

	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	計
1918年度	5,344	16,490	15,401	10,611	6,311	1,017	1,982	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.	57,155
1919年度	2,576	13,028	8,320	3,789	3,161	1,046	32	3,069	1,341	238	121	113	36,833
1920年度	736	3,422	2,770	990	997	n.a.	n.a.	54	131	293	263	90	9,747
1921年度	630	10,467	4,856	146	106	49	1,809	614	29	65	59	n.a.	18,830
1922年度	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.	n.a.	281	n.a.	n.a.	n.a.	281

出所：「沙市地方特産物輸出状況」『通商彙纂』第775号（1920年10月25日），2473頁。「沙市地方ニ於ケル棉花状況」『通商公報』第728号（1920年5月20日），677頁。「沙市棉花市況」『通商公報』第787号（1920年12月2日），2901頁。「沙市棉花市況 十一，十二及一月」『通商公報』第818号（1921年3月24日），904頁。「沙市棉花商況 十，十一月」『通商公報』第902号（1922年1月9日），27頁。「沙市棉花商況（自大正十年十二月至同十一年四月）」『通商公報』第952号（1922年6月19日），11頁。「沙市地方特産物輸出状況」『通商公報』第986号（1922年10月2日），17頁。

では、棉花年（9月1日から翌年の8月31日）が採用されるので、本表もそれに準じている。全ての月の移出量が網羅されているわけではないが、1922年度を除き、各年度の傾向は読み取れるであろう。黄金期以前のピークであった1918年度には出廻り期より順調に取引が開始され6万担の棉花が移出された。しかし、1919年度9月の移出量は前年より半減し、総移出量も2万担以上の減少を示し、1920年度には1万担を切っている。1921年度には回復を見せたが、移出量は1918年度の三分の一程度であった。また、黄金期には汽船を用いて漢口へ在来種棉花を輸送する中国商人も現れていたため⁴¹⁾、全ての数字が米国種棉花の移出量を表すのではないが、米国種棉花の移出量が確実に減少していたことがわかる。

日本向け米国種棉花輸出の減少は、棉花の取引形態にも顕著にあらわれた。黄金期以前は日本商社の多くは米国種棉花の買付けの際に、産地買付を選択したが、1919年以降、産地買付ではなく沙市の花行からの買付が選択され始めた。例えば、1920年の9月から11月の米国種棉花の取引量は約3,500～5,000担であり、産地買付された棉花は約2,500～2,600担であった。一方、日本商人と当地の花行との間で行われた取引は千担程度であった⁴²⁾。花行からの買付けが拡大し、沙市に店舗を有する花行に手付金を交付して、先物契約が行われるようになったのである。

日本商社の産地買付による米国種棉花の取引の減少は、米国種棉花と在来種棉花の価格に大きな影響を与えた。表4は1918年末から1922年までの沙市の棉花価格を表したものである。『通商公報』では米国種の価格が在来種の価格よりも高価にあることが普通であったことが何度も指摘されている⁴³⁾。しかし、表より1919年9月から少なくとも1921年9月まで、在来種の方が米国種よりも高値にあったことがわかる。さらに、1922年6月頃の状況を表す資料にも在来種棉花の相場は米国種棉花より1～2両高であったことが指摘されている⁴⁴⁾。ただし、1922年の9月には再び米国種が在来種の価格を上回り、常態に復していた。

つまり、沙市市場では、黄金期にあたる1919年9月から1922年6月まで在来種が米国種の価格を上回り、特殊な状況にあったのである。こうした棉花価格の逆転は産棉地帯における棉花

表4 沙市市場における各種棉花価格 (単位=両)

	棉花	在来種	米国種
1918年11月	39.5		
11月末	35~38		
12月前半		31.5~34.5	
12月後半	32~35		
1919年1月	36~37.8		
2月		34.5~37.8	
3月	34.5		
4月	29.5~35		
5月	31~38		
1919年9月頃	34		
9月15日		44	34
10月1日		44	34
10月15日		44	36
11月1日		38	38
11月15日		38	36
12月1日		39	36
12月15日		39	
1920年1月1日		41	37
1月15日		41	
2月1日		46	38
2月15日		46	
3月1日		44	38
3月15日		42	
5月初旬	24~25		
1920年9月5~6日	23.8		
10月中旬		26	24
11月			24~25
12月			25
1921年1月		28	26
1921年9月中旬		34	32
9月後半		40	38
10月中旬	48		
11月7日	43		
11月8日	36		
12月		42~43	41
1922年1月		40~41	39
2月		42.7~43.7	41.7
3月		45.8~46.8	44.8
4月		47.8~48.8	46.8
1922年9月	31~36	29~34	31~36
11月下旬		34~35	36~37

出所：「沙市棉花商況」『通商公報』第587号（1919年1月23日），163頁。「沙市に於ける棉花商況」『通商公報』第639号（1919年7月21日），217頁。「沙市に於ける新棉花初相場」『通商公報』第657号（1919年9月18日），835頁。「沙市地方ニ於ケル棉花状況」『通商公報』第728号（1920年5月20日），676頁。「沙市棉花市況」『通商公報』第787号（1920年12月2日），2901 - 2902頁。「沙市棉花市況 十一，十二及一月」『通商公報』第818号（1921年3月24日），904頁。「沙市地方に於ける棉花収獲並市況」『通商公報』第883号（1921年10月27日），23頁。「沙市棉花商況 十，十一月」『通商公報』第902号（1922年1月9日），26頁。「沙市棉花商況（自大正十年十二月至同十一年四月）」『通商公報』第952号（1922年6月19日），11頁。「沙市棉花状況」『通商公報』第994号（1922年10月26日），6頁。「沙市に於ける棉花状況」『通商公報』第1024号（1923年1月29日），27頁。

生産に影響を与えた。沙市の産棉地帯は、1918年までの米国種棉花の高騰によって米国種棉花生産を拡大させていたが、黄金期における両棉花の価格の逆転が米国種棉花生産から在来種棉花生産への転換を促していたと思われる。

花行を介した取引と米国種棉花生産の衰退は約2～3年間続いたが、1922年には産地買付が再開された⁴⁵⁾。この要因として、花行との先物契約の多くが、契約不履行に終わったこと、手付金の回収が困難であったことが挙げられている⁴⁶⁾。しかし、こうした取引上の問題は、19世紀以来たびたび指摘され、日本商社も強く認識しており、この時期に改めて強調されるべき問題ではないはずである。そもそも、日本商社が産地買付をおこなった要因は米国種棉花を買付けることであった。そのため、産地買付の再開は、1922年以降米国種棉花の買付が再開されたことを示し、さらに、米国種棉花生産が拡大に転じることを示しているのである。このことを裏付けるように、1922年の9月以降、産地買付の開始とともに米国種が在来種の価格を再び上回ると、在来種棉花の栽培が減少する一方で、米国種棉花栽培が再び拡大に転じていたことが指摘されている⁴⁷⁾。

(3) 小括

では、本節を終えるに当たり、沙市産棉地帯で見られた米国種棉花の1918年までの拡大、1919年から1922年の縮小、1923年以降の拡大という現象は、沙市産棉地帯にだけ起きたのか、それとも産棉地帯一般に起きていたのか、見ていきたい。

表5は、1921年から1923年における山東・山西・陝西の各種棉花生産量を示したものである。山東省の産棉地帯では1910年代に在来種・米国種の両種の棉花生産を展開し、米国種棉花生産が一定程度拡大していた。山西省・陝西省の産棉地帯は1910年代に形成され、その多くは米国種棉花生産に特化し、特に、陝西省で生産された米国種棉花は陝西棉という商標で中国最良質の棉花として知られていた。こうした1910年代までの状況を踏まえて、1920年代初頭の状況を検討すると、山西省では、在来種棉花が米国種棉花の生産を上回っていた。このことは、黄金

表5 各省の各種棉花生産量と生産面積

(単位=生産量は千担, 棉田は千畝)

省名	棉種	1921		1922		1923	
		生産量	棉田面積	生産量	棉田面積	生産量	棉田面積
山東	在来	292	2281	999	3511	1375	3640
	米国	12	52	7	24	13	37
山西	在来	144	483	156	805	186	750
	米国	105	212	8	34	45	126
陝西	在来	2	11	59	184	39	144
	米国	428	2394	418	1684	423	1498

出所：華商紗廠聯合会棉産統計部編『民国十年棉産調査報告』6-22頁、同編『民国十一年棉産調査報告』7-38頁、同編『民国十二年棉産調査報告』13-71頁。

期における在来種棉花需要の拡大を反映していると思われる。また、山東省も同様のことがいえるであろう。陝西省の棉花は中国で最良質の米国種棉花として知られ、1910年代においても、上海紡績業の20番手以上の綿糸生産に使用されていた。そのため、黄金期においても米国種棉花生産が維持されていたと思われる。

表の出所の編集者である華商紗廠聯合会棉産統計部も指摘しているように、この時期の統計には多くの誤植があり、全ての数字を鵜呑みにすることはできない⁴⁸⁾。しかしながら、1922年における米国種棉花の減少と1923年の拡大は3省に共通していた。このことは、沙市で見られた現象が、中国の各地域でも同様に見られた一般的な現象であったことを示唆していると思われる。

おわりに

黄金期の国内市場における在来種棉花需要の増加と1920年前後の日本向け中国棉花輸出の減少は、1919年から1921年の棉花市場に前後の期間とは異なる市場環境を作り出した。在来種棉花需要の拡大と米国種棉花需要の減少が両棉花の価格を逆転させたため、揚子江中流域最大の棉花集散地であった漢口市場における沙市棉価格は低水準を推移し、在来種棉花の価格水準に接近していた。

1918年まで沙市の産棉地帯では、日本商社の産地買付によって米国種棉花生産が進展したが、1919年9月以降、沙市から日本向けの米国種棉花輸出が途絶すると同時に産地買付は減少した。こうした変化は沙市市場における棉花価格に反映された。1919年以前は米国種が在来種より高価であったが、1919年9月から1922年6月まで在来種が米国種の価格を上回り、沙市産棉地帯は1919年以前とは異なる市場環境に置かれたのである。そのため、産地買付の減少と米国種棉花価格の停滞によって、沙市産棉地帯では、米国種棉花の栽培面積は縮小した。黄金期の沙市では米国種棉花生産が生産されるための二つの条件が消滅し、再度、在来種棉花への作付転換が進展していたのである。

しかし、1923年以降、再び米国種が在来種の価格を上回り、産地買付が再開されると、沙市の産棉地帯では米国種棉花生産が再度拡大に転じた。沙市の米国種棉花生産は1918年までの拡大、1919年から1922年までの衰退を経て1923年以降の再拡大を迎えたのである。

こうした米国種棉花生産の展開は、中国全体に適應できるものであるか、沙市産棉地帯特有のものであったかは、資料の制約もあり、断定することは困難である。しかし、日本向け米国種棉花輸出の減少と国内市場における在来種棉花需要の拡大は、沙市産棉地帯だけに限定された影響ではなく、その他の産棉地帯にも影響を及ぼしていたはずである。そのため、米国種棉花生産の衰退は他地域でも起こっていたと推測される。表5からもこうした傾向は読み取れる。また、起こっていたからこそ、先行研究では1910年代以前ではなく1920年代以降の米国種棉花

生産の拡大が強調されてきたのであろう。

本稿が示した黄金期の棉花生産は、1910年代以前と1920年代以降の棉花生産の変容過程を結びつけるものであり、棉花生産は、1910年代までの米国種棉花の拡大期、黄金期の米国種棉花の衰退期、1920年代以降の米国種棉花の再拡大期の三期に時期区分することが可能である。それぞれの時期で市場が求める棉花の種類に対応して棉花生産が展開していたことは、市場の変動に対して小農が柔軟に作付転換を行っていたことを示しているのである。

註

- 1) 小農社会とは、「農業社会において、自ら土地を所有するか他人の土地を借り入れるかを問わず、基本的には自己および家族労働力のみをもって独立した農業経営を行う小農が、支配的な存在であるような社会」のことである(宮嶋博史「東アジア小農社会の形成」溝口雄三・浜下武志・平石直昭・宮嶋博史編『アジアから考える[6] 長期社会変動』東京大学出版会, 1994年, 70頁)。
- 2) 長繊維棉花は機械を用いた紡績に適した原料であったのに対し、手織りには不向きであった。短繊維棉花はその逆である。
- 3) 拙稿「清末民初揚子江中上流域における棉花流通」『社会経済史学』第71巻第6号(2006年3月); 拙稿「20世紀初頭華北産棉地帯の再形成」『社会経済史学』第74巻第3号(2008年9月)。
- 4) 上野章「1930年代の中国の棉花生産」『社会経済史学』第53巻第1号(1987年4月); 弁納オー『華中農村経済と近代化—近代中国農村経済史像の再構築への試み—』汲古書院, 2004年, 第1編第5章; 森時彦『中国近代綿業史の研究』京都大学学術出版会, 2001年, 379-391頁; 久保亨『戦間期中国の綿業と企業経営』汲古書院, 2005年。
- 5) 大蔵省主税局『大正九年外国貿易概覧』1921年, 428頁。
- 6) 森『中国近代綿業史』, 369頁。
- 7) 「沙市棉花商況」『通商公報』第587号(1919年1月23日), 3頁。
- 8) 紡錘数に関して、中国近代紡織史編纂委員会編『中国近代紡織史 下巻』中国紡織出版社, 1997年, 444頁及び上海市棉紡織工業同業公籌備会編『中国綿紡統計史料』1950年, 1-2頁を参照。
- 9) 森『中国近代綿業史』, 160, 162頁。
- 10) 楚安紡績(7万錘)と申新紡績(1万5千錘)は16番手以下の綿糸生産に特化していたが、漢口第一紡績(7万3千錘), 裕華紡績(3万錘), 震寰紡績(2万錘)では20番手, 22番手, 32番手, 42番手綿糸が生産されていた(「武漢地方の紡織工業」『大日本紡績連合会月報』(以下『月報』と記す。時期において書名が異なるが、本稿では『月報』と統一する。)第371号(1923年7月), 42-44頁)。しかし、20番手以上の綿糸生産量は少なく、5つの紡績工場の総生産量は10番手が14,994俵, 14番手が11,172俵, 16番手綿糸が86,142俵であった(西川喜一『棉工業と綿糸綿布』支那経済綜攬第3巻, 日本堂書房, 1924年, 303頁)。

- 11) 森『中国近代綿業史』160, 397頁.
- 12) 湖北省志貿易志編纂室編『湖北近代経済貿易史料選輯（1840-1949）』第二輯, 1984年, 67頁.
- 13) 裡河棉は天門, 沔陽, 漢川, 漢陽県で産出された棉花を指す（臨時産業調査局『支那ノ棉花ニ関スル調査』其ノ二, 湖北省, 1918年, 11-12頁）.
- 14) 「漢口の中入用棉花」『月報』第374号（1923年10月）, 48-49頁.
- 15) 「漢口」, 48頁.
- 16) 大蔵省主税局『大正十一年大正十二年外国貿易概覧』1924年, 245頁.
- 17) 沙市の記述に関して, 拙稿「清末民初揚子江」を参照.
- 18) 臨時産業『支那ノ棉花』123頁.
- 19) 「沙市地方ニ於ケル棉花状況」『通商公報』第728号（1920年5月20日）, 675頁.
- 20) 「沙市地方」, 675頁.
- 21) 「沙市地方」, 675頁.
- 22) 「沙市棉花商況」『通商公報』第587号（1919年1月23日）, 163頁.
- 23) 1俵を3担で計算.
- 24) 「沙市に於ける棉花商況」『通商公報』第639号（1919年7月21日）, 217頁.
- 25) 「沙市地方に於ける棉花作柄及収穫予想」『通商公報』第659号（1919年9月25日）, 928頁.
- 26) 「沙市地方」, 676-677頁. この数値は自家消費量を含んでいないと思われる.
- 27) 「沙市地方」, 676頁.
- 28) 「沙市地方」, 677頁.
- 29) 「沙市地方」, 677頁.
- 30) 「沙市地方」, 676頁.
- 31) 「沙市地方棉花作柄」『通商公報』第773号（1920年10月18日）, 2406頁.
- 32) 「沙市棉花市況」『通商公報』第787号（1920年12月2日）, 2901頁.
- 33) 「沙市棉花」, 2901頁.
- 34) 「沙市棉花市況 十一, 十二及一月」『通商公報』第818号（1921年3月24日）, 903頁.
- 35) 「沙市棉花市況 十一, 十二及一月」, 904頁.
- 36) 「沙市地方に於ける棉花収穫並市況」『通商公報』第883号（1921年10月27日）, 23頁.
- 37) 「沙市棉花商況 十, 十一月」『通商公報』第902号（1922年1月9日）, 26頁.
- 38) 「沙市棉花商況（自大正十年十二月至同十一年四月）」『通商公報』第952号（1922年6月19日）, 11頁.
- 39) 「沙市棉花状況」『通商公報』第994号（1922年10月26日）, 6頁.
- 40) 「漢口新棉花市況」『通商公報』第985号（1922年9月28日）, 8頁.
- 41) 「沙市に於ける棉花状況」『通商公報』第1024号（1923年1月29日）, 27-28頁.
- 42) 「沙市棉花市況」, 2901頁.

- 43) 「沙市棉花市況」, 2902頁.
- 44) 「沙市棉花商況 (自大正十年十二月至同十一年四月)」, 11頁.
- 45) 「沙市に於ける棉花狀況」, 27頁.
- 46) 「沙市に於ける棉花狀況」, 27頁.
- 47) 「棉花狀況 (沙市)」『通商公報』第1117号 (1923年12月17日), 12頁.
- 48) 華商紗廠聯合会棉産統計部編『民国十八年棉産調査報告』, 15頁.

参考文献

和文

- 上野章「1930年代の中国の棉花生産」『社会経済史学』第53巻第1号 (1987年4月).
- 久保亨『戦間期中国の綿業と企業経営』汲古書院, 2005年.
- 瀬戸林政孝「清末民初揚子江中上流域における棉花流通」『社会経済史学』第71巻第6号 (2006年3月).
- 瀬戸林政孝「20世紀初頭華北産棉地帯の再形成」『社会経済史学』第74巻第3号 (2008年9月).
- 弁納才一『華中農村経済と近代化—近代中国農村経済史像の再構築への試み—』汲古書院, 2004年.
- 溝口雄三・浜下武志・平石直昭・宮嶋博史編『アジアから考える[6] 長期社会変動』東京大学出版会, 1994年.
- 森時彦『中国近代綿業史の研究』京都大学学術出版会, 2001年.
- 横浜市編『横浜市史 資料編二 日本貿易統計 (増訂版) 1868~1945 統計編』有隣堂, 1958年.
- 大蔵省主税局『外国貿易概覧』各年.
- 『大日本紡績連合会月報』各号.
- 『通商公報』各号.
- 『通商彙纂』各号.
- 鉄道省運輸局『綿糸, 棉花, 麻, 苧類ニ関スル調査』1927年.
- 西川喜一『棉工業と綿糸綿布』支那経済綜攬第3巻, 日本堂書房, 1924年.
- 臨時産業調査局『支那ノ棉花ニ関スル調査』其ノ二, 湖北省, 1918年.

中文

- 中国近代紡織史編纂委員会編『中国近代紡織史 下巻』中国紡織出版社, 1997年.
- 上海市棉紡織工業同業公籌備会編『中国綿紡統計史料』1950年.
- 湖北省志貿易志編纂室編『湖北近代經濟貿易史料選輯 (1840-1949)』第二輯, 1984年.
- 華商紗廠聯合会棉産統計部編『棉産調査報告』各年.

The fluctuation of the cotton market and the response in the cotton-producing districts in Shashi in the beginning of the 20th century

Masataka Setobayashi*

Abstract

The aim of this article is to consider the changes occurring in cotton-producing districts during the heyday (1919-21) of China's spinning industry. It is clear that the spinning industry started to produce higher quantities of yarn beginning in the 1920s and there was a rich harvest of long-staple cotton (called "American cotton") in China.

However, as my previous paper indicates, cultivation of American cotton, which was produced for the Japanese market, started in the cotton-producing districts of North China and the middle Yangtze Valley by the 1910s. Especially in Shashi (Hubei province), more than fifty percent of cotton produced by around 1915 was American cotton.

The reasons for the expansion of American cotton production were that Japanese trading companies bought raw cotton directly from farms, and that the price of American cotton was higher than that of native cotton.

Though the production of American cotton increased in Shashi by the end of 1910s, the market environment changed between 1919 and 1921. Spinning industries developed rapidly, increasing demand for raw cotton in China. As a result, the demand for the domestic market increased. In addition to this, because they produced low count yarn, they needed native cotton instead of American cotton. This caused the cultivation of American cotton to decrease.

From this we can see that the market environment changed for the farmers and that they were able to rapidly adapt to that fluctuation.

Key words

China, Shashi, cotton market, American cotton, peasant,

* Correspondence to : Masataka Setobayashi
Advanced Research Centers, Keio University/Researcher
2-15-45 Mita, Minato-ku, Tokyo 108-8345 Japan
E-mail : msetobayashi@gamma.ocn.ne.jp